

井沢元彦

邪神復活

忍者レイ・ヤマトの
目覚め

角川文庫

じゃ しん ゑつ かつ
邪神復活

い ざわもとひこ
井沢元彦



角川文庫 6695

昭和六十二年三月二十五日 初版発行

発行者——角川春樹

発行所——株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二—十三—三

電話 編集部〇三—二三八—八四五—

営業部〇三—二三八—八五二—

千一〇二 振替東京③一九五二〇八

印刷所——旭印刷 製本所——大谷製本

装幀者——杉浦康平

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

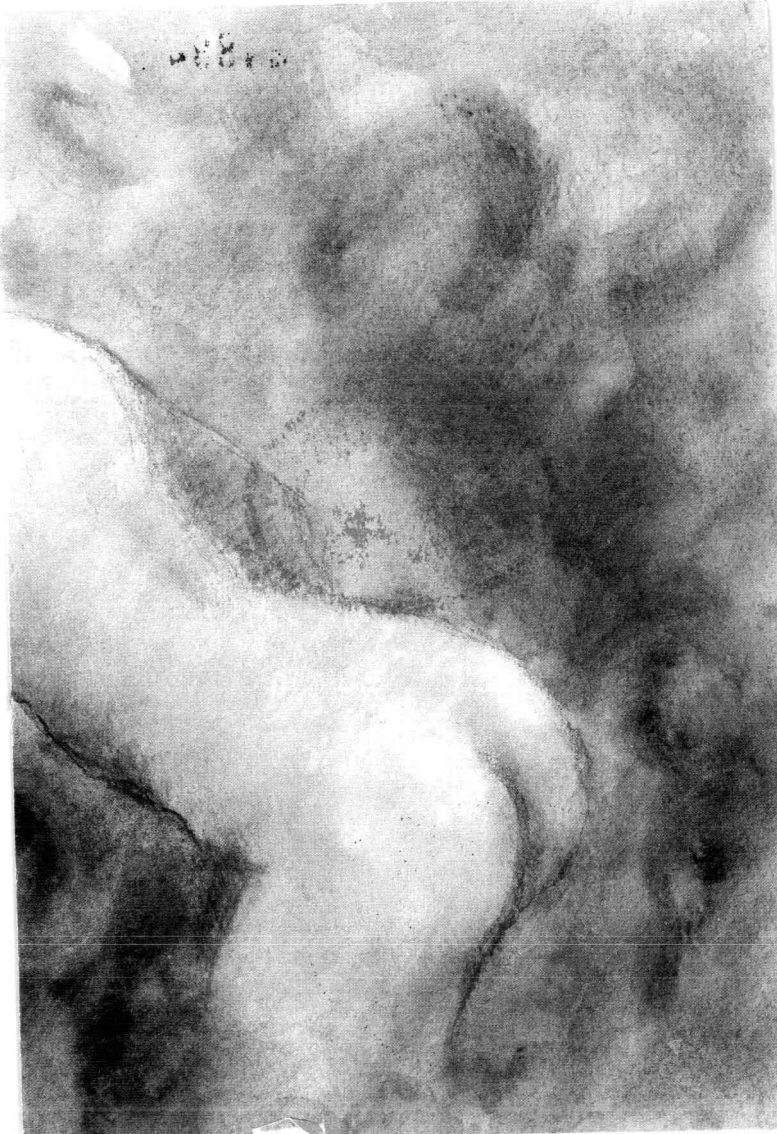
定価はカバーに明記してあります。

Printed in Japan

ISBN4-04-166203-6 C0193

邪神復活





「夜来る盗人のように
主イエス・キリストは

思いがけない日に再臨する」

テサロニケ人への第一の手紙

第5章第2節

1

ロサンゼルス・USA。

一九八五年十月二十日。

アメリカ合衆国西部教区を統轄する枢機卿ロバート・カミングスは、国際空港近くの安ホテルで、額にうっすらと汗を浮かべて報告書をタイプしていた。

それは、こんな書き出しである。

私は恐ろしい大罪を犯してしまったことを、ここに告白する。この罪は主イエス・キリストを裏切ったユダの罪にも匹敵するものである。ヴァチカン法王庁としては、ただちに、この世紀の大陰謀に対して迅速かつ強力な手段を講じることが必要である。これにはいささかの誇張もない。その大陰謀を彼らはSAプロジェクトと呼んでいる。SAとは……”

カミングス枢機卿の頭には、ワールド・シリーズの経過も、来年元日に行なわれるローズ・ボウルの予想も、まったくなかった。あるのは、ただ激しい悔恨と、かつては自分も加わっていた陰謀の内容を一刻も早くヴァチカンへ知らせたいという望み、それだけである。

空港はすでに奴らの手で監視されている。

奴らは決してカミングスがヴァチカンの土を踏むのを許さないだろう。

フリーウェイを車で飛ばして市内を脱出するという手も、あまり期待できない。

車による殺しは奴らの得意とするところである。それに枢機卿は車の運転が得意ではなかった。いつも運転してくれる信者のバートを道連れにするわけにはいかない。彼には妻と三人の子供がいるのだ。

最も原始的な手段こそ、この場合は有効だ。それは報告書を郵送することである。

奴らにしたところで、このロサンゼルスから世界に向けて出される何十万もの郵便物の中から、彼の報告書を選び出すことはできないはずだ。皮肉なことに奴らの陰謀も要約すればタイプ用紙三枚に収まってしまふ。

電話をかけるという手も考えた。

だが、そのためにはヴァチカンへの直通番号を回さねばならない。ロサンゼルス、いやもつと広い範囲のコンピュータシステムを握っている奴らにとって、ひよっとしたら、電話の掛け手の存在を発見するのは容易かもしれないのだ。枢機卿はその危惧を捨てることではできなかった。短時間なら大丈夫かもしれない。しかし、もし万一、彼の存在が探知され、ヴァチカンに通報できなくなったら、とりかえしのつかないことになる。

そんな冒険は出来なかった。

それよりも手紙の方がいい。

イタリアの郵便事情は世界最悪だが、それでもヴァチカン国務長官宛の封書なら、なんとか

運んでくれるだろう。あれだけの監視網を持ちながら、たったタイプ用紙三枚の報告書が、奴らのプロジェクトを未然に防ぐことになる。

アメリカ人としても小柄で、身長が百六十センチしかないカミングス枢機卿は、額の汗を手の甲で拭うと、完成した報告書をタイプライターからはずそうとした。

突然、背後から声がかかった。

「そこまでだ、神父さん」

枢機卿は絶望の色を顔に浮かべて振り返った。

モスグリーンのトレンチコートを着た背の高い男が、右手にリボルバーを持って立っていた。顔は浅黒く、冷たく引き締まっている。ヒゲの剃り跡が嫌らしいほど青く、目は象のように細いが鋭く、刃物のような印象を与える。

「フィル、私を殺す気かね？」

枢機卿はタイプ用紙の文面をかくすように椅子を蹴って立ち上った。死を恐れる気持ちはない。ただ、この悪魔の計画の内容をぜひと知らせなければならぬ。そのためには、おいそれと死ぬわけにはいかなかった。

「それは、あんた次第だな」

とフィルは言った。

「我々のところへ戻ってくるならば話は別だ」

枢機卿はフィルから視線をはずして、その白くなった頭の中で、主の教えにさからい嘘をつ

くことを検討し始めた。

とにかく、この陰謀をつぶすためなら、たとえユダの弟子になったとしても、主はお許しになるだろう。

「——確かに、その申し出は魅力的だな、フィル。少し考える時間をくれないか？」

枢機卿は媚びるような笑いを無理に口元に浮かべて言った。

殺し屋は冷笑した。

「神父さん。あんた、嘘をつくのはあまり得意じゃねえな」

「嘘だって、とんでもない」

枢機卿は灰色の瞳をばちちさせて、精一杯の抗議を試みた。

殺し屋は、まるでこれから枢機卿とコーヒを飲みに行くかのような微笑を浮かべ、リボルバーを握り直した。

「壁のところへ行きな」

「待ってくれ、考える時間をくれ」

「無駄なおしやべりはもう沢山だ」

殺し屋は吐き捨てるように言うのと、枢機卿の上着の襟を掴んで壁に両手をつかせた。そして、デスクの上にあるタイプライター用紙に目を走らせた。

「——ユダに匹敵する罪か」

殺し屋は口笛を鳴らした。

「私を、どうする気かね？」

枢機卿の質問に、殺し屋は報告書をくしやくしやくに丸めポケットに入れてから答えた。

「——あなたはこれから罪を犯すのさ。つまり『自殺』の罪というやつを」

殺し屋は自分のユーモアのセンスに満足したのか、再び人の好きそうな微笑を浮かべると、枢機卿の首筋に空手チョップを打ち込んだ。

2

ローマの西部を流れるテベレ川を渡り、コンチアツィオーネ通りの終点に着くと、そこがカトリックの総本山サンピエトロ大寺院である。寺院の周囲四十四ヘクタールは、ヴァチカン市国としてイタリアから分離され独立国となっている。

ヴァチカンの領土そのものは小さいが、その影響力は計り知れない。

全世界に七億人いるというカトリック信者だけでなく、キリスト教世界、その他の世界すべてにヴァチカンの動向は注目されている。

もちろんその代表は神の代理人として聖書にもその権利が認められているローマ法王である。ロサンゼルスでカミングス枢機卿が報告書をタイプしていた時から三十六時間後、ヴァチカン法王庁の國務長官マルコ・マッジョーレ枢機卿は、ヴァチカン宮殿のエレベーターで三階に上がった。

ヴァチカン宮殿は、サンピエトロ広場から見ると向って右側にある。多くの信徒や観光客で

にぎわう石造の巨大なドームや回廊とは少し離れており死角になっている。

法王ロマノ二世は避暑用の別荘カステル・ガンドルフォから専用ヘリコプターで急遽戻ってきていた。

マッジョーレ枢機卿はことし五十五歳。フィレンツェ生まれのイタリア人で、東洋——特にフィリピン・マレーシア・日本などでの布教経験が長い。本来ならば、そういった経歴の間は法王庁の官僚となることは少ないのだが、彼の場合は教会組織についての優れた理論家である点や、近親者に法王庁で敏腕をうたわれた人がいたのが幸いした。中肉中背で、髪は茶、東洋人のような細い目に眼光が鋭い。

彼は背を折り曲げ、せかせかとした足取りで、エレベーターを降りると、まっすぐに法王専用の図書室に向った。

その緊張した様子に、ベレー帽をかぶり三色のストライプの派手な制服を着たスイス人護衛兵が驚いて道を空けた。

図書室で、白の法服をまとった法王は、沈痛な表情で机に向い文献を調べていた。

机はマホガニー製で十六世紀から歴代の法王に愛用されているものである。

両面に二十の引き出しがあり、開き戸が二つついている。上蓋には寄せ木細工でアダムとイブの神話が描かれている。

「マッジョーレ君」

と法王はその神経質そうな眉をひそめ、澄んだ蒼い目で救いを求めるように呼びかけた。

マッジョーレは黙って頷いた。

法王を悩ませているのは、机の隅に無造作に投げ出されているいくつかの新聞の見出しである。枢機卿、ロサンゼルスで投身自殺——他の見出しも似たようなものだ。

信仰のリーダーシップをとらねばならない枢機卿が、こともあろうに自らの命を断つとは、あつてはならない不祥事だった。

自殺はクリスチャンにとって最大の罪の一つである。神の救いに対する絶望を表明することになるからだ。

「カミングス枢機卿の死は事故の可能性はないのかね？」

フランス生まれの法王は、そのよく整った顔立ちをしかめさせたまま、なまりの残るイタリヤ語で早口に言った。

「まったく、ありません」

マッジョーレはにべもなく否定した。

法王はその態度に軽い憎しみをすら覚えた。

もともと法王は就任以来、この国務長官が気に入らなかつた。鉤鼻の上にある細い目を光らせ、ときどき鋭い皮肉を言う。マッジョーレはひょっとして、自分のことを法王としては不適格者と断じているのではないか、と不安に思うことがあつた。口にくそ出さないものの、いかマッジョーレが自分にアビニオンにでも引退しろと言うのではないかと、そんな妄想にとらわれることすらあつたのである。

「しかし、原因は一体何なのだ。伝統あるヴァチカンの枢機卿すうききやうが自らの命を断つなど、どうしても信じられん」

「その通りです、げいか貌下」

意外な国務長官の言葉に、法王は不思議そうな顔をした。

「どういうことかね。君はいま事故の可能性はないと断言したばかりではないか」

「そうです」

「では、一体？」

「――殺されたのです」

それを聞くと、法王は何度も首を振った。

「それこそ、ありえないことではないのかね」

「法王さま、よくお考え下さい。神への奉仕を誓った者が、ビルの十五階から落ちて無惨な死を遂げた。状況から見て、事故ということは考えられない。とすれば、他殺か自殺かの二通りしかありません。自殺でなければ他殺ということになります」

マッジョーレは理詰めの口調で言った。

「しかし、何か他殺だという証拠でもあるのかね？」

法王の疑わしげな様子に、マッジョーレは黙って一通の手紙を差し出した。航空便である。

「これは？」

法王は訊いた。

「つい最近、ボブから私に來た手紙です」

「ボブ？」

「そうです。ロバート・カミングス大司教、私の年来の友人でした。同じ修道院で修業し、東洋で布教にあたったこともあります」

「そうか——私の方からもお悔^{くや}みを言おう」

「ありがとうございます」

法王はマッジョーレから手紙を受け取ると、

「中を見てもいいかね？」

と訊^きいた。

「どうぞ、読んでみて下さい」

手紙には英語で次のようなことが書かれていた。

親愛なるマルコ

私は今どうしていいのかわからない。

こんなことを相談できるのは君だけだ。どうか聞いてくれたまえ。

君はアメリカ合衆国カリフォルニア州のバサデナに根拠^{こんきょ}を置くジェンキンス財団を知っているだろう。穀物と石油の二つの物資のメジャーであり、強大な財力を持つジェンキンス財団の

ことを。

実は一年前から、私はジェンキンス財団の統帥^{とうすい}ハワード・T・ジェンキンスに協力して、あるプロジェクトに参加していた。

プロジェクトというのは、合衆国内のカトリック信徒を大幅^{おおはば}に増やすため（知つての通り合衆国内の信徒数は全人口の二十四パーセント、決して満足すべき数字ではない）、ジェンキンス財団がまったく新しいタイプの大規模な布教活動——信徒獲得^{かくとく}作戦と言った方がいいかもしれない——を行なうので顧問^{こもん}として力を貸して欲しい。そういう触れ込みだった。ハワード・T・ジェンキンスは、アメリカのエスタブリッシュメントの中では最も有力なカトリック信徒だ。

私は喜んで協力を約した。

だが、そのプロジェクトに深入りするに従つて、それが実に恐ろしい冒瀆^{ぼうとく}的な悪魔^{あくま}のプロジェクトであることが明らかになってきた。それは一口には言えない。これから、さらに確かめたいこともある。しかし、私の想像が最も悪い形で当たっているとすれば、ハワードのプロジェクトは、カトリックのみならずプロテスタントも含めて、世界中のクリスチャンに、そしてヴァチカン法王庁に、壊滅^{かいめつ}的な打撃^{だげき}を与えるものであることはまちがいない。それは世界の構造すら大きく変えてしまうものだ。これは決して冗談^{じよたん}でも誇大^{こだい}な表現を取っているのでもない。彼ら^{かれ}のプロジェクトの成功は、ある科学技術の開発にかかっている。現時点では、私の想像に過ぎない。それがはざれていることを神に祈^{いの}りたい気持ちだ。だが、おそらくそれははざれて

はいまい。私はもう一度、彼らのもとに帰り、彼らのプロジェクトが技術的に可能なのか、どこまで進んでいるのか確かな情報を得てくるつもりだ。

いずれ詳しく報告するから、君達もそれまで準備を整えて待っていて欲しい。

これはヴァチカン法王庁と怪物ハワード・T・ジェンキンスと、いや、それよりも平和を愛するすべての人達と悪魔との戦いなのだ。

このことを肝に銘じてくれたまえ。

君の親愛なる友、

ボブ・カミングス

「このハワード・ジェンキンスなる人物は、あの幻の大富豪」と呼ばれる男のことか？」
手紙を読み終った法王が訊いたのは、まずそのことだった。

「そうです」

マッジョーレは答えた。

ハワード・T・ジェンキンスは、アメリカで二つの王座に就いている。原油と小麦である。その二つの源泉から生み出される富は天文学的なもので、到底計算できない。ただジェンキンスが有名なのは、その莫大な富よりも極端な人嫌いという点にある。彼は公衆の面前に決して姿を現わさないし、二十年以上も前から公けの場にも顔を出さなくなった。